

2018/03/04 礼拝メッセージ 成田宜庸 長老
 主 題：神のみもとに行くことができます～ただ一つの道～
 聖書箇所：ヨハネの福音書14章6節

私は学生時代、山岳部に入りまして、ほとんど山登りが本職のような感じで大学生活を送りました。山登りにおいて、目指すのは一つの頂です。でも登る道はたくさんあります。今年尾根から登った、来年は谷筋を登る、また雪の降る時には違うルートを探す、夏には岩のある所を登る。このように山登りにおいて頂を目指して登る道はたくさんあります。富士山も様々なルートがあります。でもどのルートを登っても頂、ある一点に着きます。

1. まことの神のみもとに至る多くの道があるのか？

世の人たちはこのことを踏まえてこう言います。「仏教であれ、キリスト教であれ、イスラム教であれ、どんな宗教を信じたって結果は同じ神のところに行くよ」。本当にそうなのでしょう？真の神に至る道はたくさんあるのでしょうか？きょう私たちはこの聖書から神のみもとに行くことができる道は沢山あるのか、あるいは一つしかないのか——。そのことを見ていきたいと思ひます。

2. 背景

きょうのテキストはヨハネ14：6です。「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」、イエス様はここでこのように言われました。この14章を含めて13章から17章まで、最後の晩餐の席でイエス様が弟子たちに言われた告別の説教が記されています。13：1に「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。」とあります。この後、様々なイエスの話が17章まで記されています。13：14-15では弟子たちに模範を示されたことが記されていますし、18-30節ではイスカリオテのユダについてイエス様はお話をされています。そして34節では「互いに愛し合」うという新しい戒めがイエス様によって示されました。そして13：33で「子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない。』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。」と言われたイエス様に対して、13：36-38でペテロが質問します。そしてイエス様が答えられています。また、14：5で今度はトマスがこんな質問をします。「トマスはイエスに言った。『主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましよう。』」、これに対して6節でイエスが「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とお答えになったのです。

この6節の前半、イエス様は「わたしは～です」と言われます。このヨハネの福音書の中でイエス様は7カ所で「わたしは～です」と言明されています。

- ①「わたしはいのちのパンです」（6：35）
- ②「わたしは、世の光です。」（8：12）
- ③「わたしは門です。」（10：9）
- ④「わたしは、良い牧者です。」（10：11）
- ⑤「わたしは、よみがえりです。」（11：25）
- ⑥「わたしはぶどうの木」です（15：5）

この「わたしは～である」ということばを聞く時、私たちは旧約のある事柄を思い出します。出エジプト3：13でモーセが神様にこのような質問をしたことが記されています。「モーセは神に申し上げた。『今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに「あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。」と言えば、彼らは、「その名は何ですか。」と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか』」、このモーセの質問に対して神は14節「わたしは、『わたしはある。』という者である。」と答えられました。イエス様は「わたしは～です」と14：6で言われています。イエス様は何を明らかにされようとしたのか——。まさに「わたしが神である」、そのような者であると弟子たちに教えるために、このような例えを使ってイエス様はご自分の本質を明らかにされたのです。

3. イエスの本質

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」、このイエス様の言われた本質を見ていきたいと思ひます。

1) わたしが道である I am the Way

旧約聖書の一番最後のマラキ書3：1に「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。」とあります。ここで言われている「わたしの使者」はバプテスマのヨハネのことです、そして「彼はわたしの前に道を整える」者だと言います。この「道」、英語で“the way”というのは、まさに神と繋がる道のことです。主が来られるという、主の来臨はその道を示す先駆けによって予告されました。予告した者は主が来られることを人々に告げ知らせ、人々の心を整えたのです。

新約聖書ルカ1：76、1：68－79にかけてザカリヤの預言歌が記されています。その中の76節に「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、」と書かれています。もちろんここで言われている人はバプテスマのヨハネのことです。「その道を備え」、まさに神と繋がる道のことです。イザヤ57：14では「道を整えよ」と記されています。それは神の民が神のみもとに来られるようにその備えをなささいということです。私たちは「道」と聞くと、様々な道があることを知っています。真っ直ぐな道や曲がりくねった道、あるいは行き止まりの道、またたとえその道を歩いて行っても目的地にたどり着けない誤った道であったり、そしてその道を歩んでいけば目的地にたどり着く正しい道であったり。イエス様はまず「わたしが道」ですと言われました。この道は神に至る正しい道のことです。イエス様がご自分のことを「わたしが道」ですと言われたのは、わたしこそがあなたがたを父なる神のみもとに導く道なのということです。

2) わたしは真理です

この「真理」というギリシャ語の意味するところは、もちろん神に属する真理のことです。このことばの語源的な意味は覆われたものがその覆いを取り除かれて明らかにされる、そういう意味を持ったことばが使われています。国語辞典では「どんな場合にも当てはまる永遠不変の知識、認識、価値である」とあります。だからこの「真理」というのは永遠不変のものです。変わることがない、そういうものを「真理」と言います。私たちはこの「真理」がどういうものであるのか聖書から教えられています。この「真理」は救いのために啓示された神のみこころとしての福音、良い知らせそのものです。ガラテヤ2：5では「福音の真理」と記されていますし、エペソ4：21では「真理はイエスにある」と記されています。

また「真理」は創造において啓示された神の御旨としての自然啓示であり、それは被造物によって明らかにされている神の真理のことです。そのことがローマ1：18、25に記されています。しかし残念ながら私たち人間はその神の真理を人間の不義をもって拒否したと記されています。「真理」は神のもので、そしてイエス・キリストによって神から啓示されるものであり、「真理」の源は神にあるのです。イエス様はここで「わたしは真理です」と言われました。それはわたしイエス・キリストが神の「真理」をあなたがたに啓示できる唯一のものであり、また、わたし自身がその「真理」なのだといエス様はここで言うのです。

3) わたしがいのちである

イエス様が自分の本質を明らかにした三つ目のことばは、わたしは「いのち」です。もちろんこの「いのち」は永遠のいのちのことです。この永遠のいのちというのはギリシャ語の二つのことばからできています、一つは「ゾーエー」（いのち）と「アイオーニオス」（永遠）ということばからできています。このことばは新約聖書で43回使われていますが、その殆どはヨハネが書き記した文章——ヨハネの福音書であり、手紙、黙示録の中で見るができます。

(1) 父なる神と主イエス・キリストにあるいのち

「永遠のいのち」、それは父なる神と主イエス・キリストにあるいのちという意味です。ヨハネ1：4に「この方にいのちがあった。」と書かれています。もちろん「この方」とはイエス・キリストのことです。またIヨハネ1：1－2に「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、——このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。——」と記されています。イエス・キリスト、彼自身が「永遠のいのち」であったとみことばは教えます。

(2) 主イエス・キリストを信じる者に与えられるいのち

また、この「永遠のいのち」はイエス・キリストを信じる者に与えられる「いのち」です。ヨハネ3：16「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」、同じヨハネ3：36にはこう記されています。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と。「御子を信じる者は永遠のいのち」が与えられるということです。

(3) 全く新しいいのち（霊的いのち）

また、この「永遠のいのち」は全く新しいいのち、霊的ないのちです。パウロはⅡコリント5：17で「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」と記しています。「永遠のいのち」は全く新しい霊的ないのちです。

私たちは「永遠のいのち」と聞いた時に、反対にあることばを思い出します。それは「死」です。私たちの死です。私たちの肉体はもちろん滅びます。今ギネスブックで最長が恐らく120歳位だと思われていますが、どんなに長生きの方でも、私たち人間は肉体的な死を迎えます。また、私たちは救われる以前、霊的に死んでいたものだともことばが教えています。それはいのちの源である神から離れて罪と暗闇の中にいた状態のことを表わしています。私たちも以前はそのような霊的な死の中にあつた。もっと大変な、まさに「永遠のいのち」と対局にある永遠の死です。永遠の死は神に立ち返る能力、機会を全く失った状態を指しています。イエス様は「わたしはいのちである」と言われました。それはイエス・キリスト自身がいのちの源なる方で、そのいのちを信じる者に与えることができる方であると言われたのです。

4. わたしを通してでなければ

1) イエス・キリストによってのみ

6節の後半「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」、まさにここにただ一つの道のことが記されています。イエス様は自分の本質を明らかにされました。イエス・キリストによってのみいのちが与えられ、イエス・キリストによってのみ真理が示され、イエス・キリストによってのみ神に至る正しい道が備えられている。このようなイエス・キリストを思う時に、私たちはパウロがこのように教えてくれている箇所を思い出します。Ⅰテモテ2：5で「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であつて、それは人としてのキリスト・イエスです。」と書き記しています。「唯一」というのは一人だけという意味です。

2) 仲介者なるイエス・キリスト

この「仲介者」の働きは対立している当事者同士を結び合わせる、仲立ちをする、そのようなものことです。違うことばで言うならば、敵対している者同士を和解させる、そのような働きをするものことです。パウロはイエス・キリストだけが神と人の間の仲介者であると教えます。ヘブルの記者もヘブル9：14-15でこう記しています。「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。」と。「仲介者」、それはイエス・キリストです。

3) わたしを通して

イエス様は「わたしを通して」と言われました。Ⅰヨハネ2：2では、「この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。」、また4：10では「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」とイエス様のことが記されています。「なだめの供え物」、それは罪人に下ろうとしている神の怒りを鎮めるための供え物のことです。このなだめの供え物である、完全な犠牲である、「わたしを通して」とイエス様は言われました。それはイエス・キリストを信じる信仰によってです。先程も言及しましたが、ヨハネ3：16でそのことが記されています。

4) ~でなければ

「わたしを通して」、なおかつ日本語の聖書には「でなければ」と書かれています。英語では「~以外に」ということばが使われています。ペテロはこのことを使徒4：12で「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。』」と私たちに教えます。「この方以外には、だれによっても救いはありません。」もちろん「この方」というのはイエス・キリストのことです。

5. 父のみもとに

1) イエス・キリストを通してのみ父のみもとに行くことができる

そしてイエス様はこの後、「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と。イエス・キリストを通してのみ私たちは「父のみもと」に行くことができるとイエス様は言うのです。この6節の前、14：2-3でイエス様がこの世を去ってどこへ行かれるのかを明らかにしています。「父の家」に行くと言われています。

2) 父のみもと（神のみもと）

またパウロはピリピ3：20で、「私たちの国籍は（救われた者たちの国籍は）天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と語っています。神のみもと、「父のみもと」、それは「天」と言うことばで表すことができます。この「天」ということばは、ヘブル語でもギリシャ語でも空を表すことばが使われています。

（1）神の御座があるところ

だからこの「天」、神のみもとは神の御座がある神の住まいであるということです。詩編33：13-14には「主は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。」と記されています。この「天」、神のみもと、それは神の御座がある神の住まいです。あの主の祈り、マタイ6：9で「天にいます私たちの父よ。」、このように祈りなさいとイエス様は言われました。

（2）栄光を受けたイエス・キリストが戻られたところ

また、この「天」、神のみもと、それは栄光を受けたキリストが戻られた神の臨在する所です。使徒1：11で、弟子の前でイエス様が天に上られて行く様子を記しています。「そして、こう言った。『ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。』」と記されています。イエス様が上って行かれた所は、「天」であり、神のみもとです。

（3）キリスト者が神とともに永遠を過ごすところ

また、ここは救われた者たちが主とともに永遠を過ごす所だと私たちは知っています。14：3「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と、イエス様は言われました。Iテサロニケ4：16-17には「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」と記されています。「父のみもと」、神のみもと、「天」、それは休息の場所です。また、ヘブル書の記者はそこは「都」と言っています。またクリスチャンのふるさと、「故郷」と記しています。

J. I. パッカーという著名な神学者は、ある本の一番最後に「地上にいる者の心は、喜びに満ちた経験のただ中で『このことが終わってほしくない』と言う。しかし例外なくそのような経験は終わりを迎える。私たち人間がこの地上で覚える喜びはすべて終わりがある。天にいる者の心は『このことが永遠に続いてほしい』と言う。そしてそれは永遠に続く。これよりも素晴らしい知らせはほかにない。」と記しています。

6. 結論

イエス様もこのヨハネ14：6で「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と語られました。ということは、イエス・キリストを通してのみ、父のみもとに行くことができるとイエス様は私たちに教えているのです。ただ一つ、これしか道はありません。世の人々は「クリスチャンの人たちはこの道しかないと言うけれども、いろいろな道があって、結局は同じ神のところに行くよ。」と言うのです。違います。みことばははっきりと違っていると教えています。イエス・キリストを通してのみです。

私たちは昨年10月29日、近藤先生からリフォーメーションの信仰というメッセージを聞きました。500年前、ルターたちが反旗を掲げた宗教改革についてのメッセージでした。この宗教改革をなした人たちは、彼らは救いに関して5つのスローガンを掲げました。それは5つのソラと言うことができます。一つは聖書のみ、2つ目は信仰のみ、3つ目は恵みのみ、4つ目はキリストのみ、5つ目は神の栄光のみ。これは救いの本質です。そのことを500年前の宗教改革者たちは、声高らかに叫んだのです。キリストのみです。キリスト以外には私たちが神のみもとに導く者はありません。パウロはローマ3：22で「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」と言います。私たちは先に救われた者として、神に至る道は一つしかないことを知っています。他に道はない。世の人々は他にも道はあると思っています。私たちはみことばがはっきりと教えているこの真理を世の人々に伝えなければいけません。その責任は私たちだけにしかないのです。神のみもとに行く道が一つしかないことを彼らは知らないのです。知っている私たちが語らなければいけないということです。